



Data
監督・製作・共同脚本: ジュリアス・オナー
原作: J・C・リーの戯曲『Luce』
出演: ケルヴィン・ハリソン・Jr. ／ナオミ・ワッツ／オクタヴ イア・スペンサー／ティム・ ロス／ブライアン・ブラッド リー／アンドレア・バング／ ノーバート・レオ・バッツ／ マーシャ・ステファニー・ブ レイク／ノア・ゲイナー／オ マール・ブランソン

👁️👁️ みどころ

あなたは「リスペクタビリティ・ポリティクス」という言葉を知ってる？私も全然知らなかったが、多分あなたも知らないだろう。これは、「差別されないように模範的な行動を取る」ことだが、その意味は？

アメリカでは2020年5月25日に発生したミネソタ州ミネアポリスでの白人警察官による黒人のジョージ・フロイド氏の暴行死亡事件以降、人種差別反対の大規模デモが続いており、名作映画ベスト100では常にトップを誇る『風と共に去りぬ』(39年)まで「人種への偏見が含まれている」として一時配信停止されたそう。

本作の主人公ルース・エドガーはバージニア州アーリントンの高校生。バラク・オバマ大統領は演説の名手だったが、ルースも順調に育てば第2のオバマに！？そんな逸材だが、彼に「リスペクタビリティ・ポリティクス」を求める女教師の“ある疑惑”から事態はあっと驚く展開に！

原作はJ・C・リーの戯曲『Luce』。ナイジェリア生まれの監督は、外交官の父親と共に渡米したというジュリアス・オナー。そんな彼からの「17歳。黒人の高校生ルース。オバマの再来と呼ばれ、誰からも称賛される少年はいったい何者なのか。完璧な優等生か、それとも恐ろしい怪物か？」という問題提起をしっかりと味わいたい。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

■□■聞いたような名前だが？第2のオバマに？■□■

同じ「黒人モノ」でも、事前の宣伝では本作より『ハリエット』(19年)の方が有名だし、チラシやネットの情報だけでは本作はそれほど面白いとは思わなかった。しかし、ウィキペディアの情報では、『ハリエット』は「批評家からの評価は平凡なものに留まっている」のに対して、本作は「批評家から絶賛されている」と書かれていたため、『ハリエット』

をやめて本作を鑑賞。

『ルース・エドガー』というタイトルを見ると、何となく聞いたような名前だが、彼は父親ピーター・エドガー（ティム・ロス）、母親エイミー・エドガー（ナオミ・ワッツ）が紛争の続くエリトリアから養子として迎えた男の子だから、その名前を知っているはずがない。バージニア州アーリントンにある高校に通っている彼（ケルヴィン・ハリソン・Jr.）は、文武両道に優れた模範的な高校生らしい。アメリカで黒人初の大統領になったバラク・オバマは、今年11月の大統領選挙ではトランプ大統領に反発して民主党のジョー・バイデン候補の支援に動き始めたが、ひょっとすると、ルース・エドガーが順調に成長すれば第二のオバマになるかも知れないような逸材だが・・・。

■監督は？原作は？■

本作の監督ジュリアス・オナーはナイジェリア生まれで、外交官の父親と共に渡米したが、任期が終わると父親は去ってしまったため、息子や母親は移民申請をして大変な苦勞をしたらしい。

他方、本作の原作になったのは、J・C・リーの戯曲『Luce』。ジュリアス・オナー監督は同戯曲が黒人を描いていることと、黒人としてのアイデンティティを中心とした対話に感銘を受けたそうだが、彼自身が本作の舞台となるバージニア州アーリントンの高校を卒業しているから、本作の脚本を書くについては、自分自身の体験が大いに役立ったはずだ。

■リスペクタビリティ・ポリティクスとは？■

本作では「リスペクタビリティ・ポリティクス」がキーワードだが、あなたはこの言葉を知ってる？これは「差別されないように模範的な行動を取ること」だが、寡聞にして私はそれを全然知らなかった。パンフレットにある宇野維正氏（映画・音楽ジャーナリスト）のREVIEWのタイトルは『ルース・エドガー』が告発する、リスペクタビリティ・ポリティクスの罠」だが、まずはその言葉の勉強をしっかりとやらなければ、このREVIEWは理解できないことになる。

本作はメチャ面白いうえ、チラシには「人間の謎めいた本質、アメリカの理想と現実をえぐり、全米で絶賛されたサスペンスフルなヒューマン・ドラマ」と書かれているが、上記のキーワードをはじめ、監督の経歴や問題意識等々、知らないことだらけだから、本作を鑑賞するにはしっかりと勉強する必要がある。

■黒人差別の深刻さは？世代間対立は？■

2020年5月25日に発生したミネソタ州ミネアポリスでの白人警察官による黒人のジョージ・フロイド氏の暴行死亡事件後、アメリカでは人種差別反対の大規模デモが続いている。2019年の第91回アカデミー賞作品賞は『グリーンブック』（18年）（『シネマ43』12頁）だったが、これは黒人差別をテーマにした映画だった。さらに、本作で歴史教師ハリエット・ウィルソン役で出演している女優オクタヴィア・スペンサーは、『ヘルプ〜心がつなぐストーリー〜』（11年）（『シネマ28』42頁）でアカデミー賞助演女優賞にノ

ミネートされているが、同作も黒人差別をテーマにした映画だった。

本作におけるハリエットは、かつてのマーティン・ルーサー・キング牧師やバラク・オバマ大統領と同じような、リベラルながらもアメリカの黒人の良心を代表する人物だが、ジュリアス・オナー監督は、本作でルースとハリエットとの「世代間の対立」にも焦点を当てたいと思ったと語っている。本作はチラシに「17歳。黒人の高校生ルース。オバマの再来と呼ばれ、誰からも称賛される少年はいったい何者なのか——。完璧な優等生か、それとも恐ろしい怪物か？」と書かれているようなスリラー的要素もあるが、「作り」としては「会話劇」だから、「黒人の世代間対立」については、ルースとハリエットとの会話（議論）をしっかりと確認したい。

■□■ハイライトの「対決」での勝者は？■□■

また、本作後半のハイライトは、校長（ノーバート・レオ・バッツ）がセットした「面談」で、ピーター、エイミー夫婦とハリエットが「対決」するシークエンスだが、そこではエイミーがあつと驚く、とんでもないウソをつくので、それに注目！また、そこに至るには、同じ理想でルースを養子にしたはずなのに、いつの間にか大きく食い違っているピーターとエイミー夫妻の会話（議論）もしっかり確認する必要がある。アメリカにおける黒人差別は根が深く複雑難解だが、本作を観ればそれがより一層わかってくる。白人警察官による黒人のジョージ・フロイド氏の暴行死亡事件以降、黒人差別の問題意識の広がりから、名作映画ベスト100では常にトップを誇る『風と共に去りぬ』（39年）も「人種への偏見が含まれている」として一時配信停止されたからビックリ。

本作の事の発端は、歴史上の人物をテーマにしたハリエットの宿題で、ルースがアルジェリア独立運動の革命家フランツ・ファノンを取り上げ、彼の過激な思想について記したことだが、そこから生まれ、少しずつ拡大していくルースとハリエットとの世代間対立は見応え十分だ。しかして、その最後の勝者は？敗者は？その原因は？オバマ大統領は演説の名手だったが、討論部のルースが、全校を代表して行うスピーチのテーマは一体ナニ？本作ラストでは、オバマ大統領の名演説を彷彿させるルースのスピーチを聞きながら、本作の圧倒的すばらしさをしっかりと確認したい。

2020（令和2）年6月19日記